

# 松村通信第67号

2007年1月5日

松村勝弘

## 賢い人

**賢い人** こんな話を聞く。「あの人(店長とか課長など)はこんな下っ端の所まで挨拶に来られた賢い人だ」などという話を聞く。また小さい子供に「まあ、上手に挨拶ができたね。賢いね」などと言う。ここで言われている「賢い」と言う言葉が何となくわかったようでわからない。疑問であった。少なくとも以前の私はそうであった。その意味がようやくわかった。

最近MBA, ビジネススクールで教えている。そこで私が指導することになったSさんが「石門心学」を勉強したいという。その根底には儒教がある。確かに儒教と資本主義の関係は深い。ウェーバーがプロテスタンティズムと資本主義の関係を論じたように、かつての森嶋通夫ロンドン大学教授も儒教と資本主義の関係を論じておられる。私も親しくさせて頂いている立命館大学小野進教授も「儒教倫理と資本主義の精神」(『立命館経済学』第42巻第4号, 1993年10月)などという論文を書いておられる。以前から私もこれらに関心をもっていた。

儒教と言えば孔子である。そこで最近、呉智英『現代人の論語』(文春新書, 2006年)と言うのを讀んだ。これを讀んでさきのかねてよりの私の疑問も氷解した。同書には次のように書かれている。

「論語の中にしばしば『賢』が出てくる。  
『賢を見ては齊ひとしからんことを思う』(里仁編 4-17)

これは、『かしこい人』を見ては自分もそのようになると励む, という意味ではない。

『すぐれた人』を見ては自分もそのようになると励む, という意味である。『賢』は, かしこさをも含んですぐれていることである。『賢者』は, 単にかしこい人ではなく, かしこくあるが故にすぐれた人である。これは, 英語の wise man が, 単にかしこい人を意味するのではなく, 聖書の中に出てくるようなすぐれた人物としての『賢者』を意味するのと同じである。

我々近代人は, 一抹の寂しさを覚えつつも, 賢者に徳が問われず, 知と徳が分離した社会を謳歌している。それはまちがいに豊かな社会である。しかし, 本章の言葉に見られるような大らかで力強い徳治主義からは遠いものだ。」(36頁)

ここで「本章の言葉」と言われているものは, 論語の次の言葉である。

「子しのたまわ曰く, 政を為せいすに徳を以てすれば, 譬たとえば北辰ほくしんのその所に居て衆星しゅうせいのこれにむかうが如し。」(33頁)

「先生がおっしゃった。徳を核にした政治は, たとえてみれば, 北極星が全天の中心にあり, 無数の星がその方向に向いているようなものだ。」(35頁)

**知と徳の分離** 賢いとは知と徳が分離する以前の言葉なのである。ところが西欧近代に毒されていた私には「知」という意味でしかこれを理解していなかったのが, 最初に述べたようにわかったようでわからなかったわけである。

「科学。それは知と徳の分離である。あるいは, 知の徳からの析出である。科学的な発見者は, ただ発見者であることによって賞賛されるのであり, 人格的にすぐれているから賞賛されるのではない。人格陋劣ろうれつな発見者であ

ろうとも、その発見は発見として析出され、賞賛される。こうした近代科学は、人類にかつてなかった豊かさをもたらした。

政治学や経済学といった社会科学についても然りである。国際情勢を分析し、景気循環を予測するのに、どうして徳を備えた人格者である必要があるか。ただ『かしこく』さえあれば十分である。」(35頁)

こういう「かしこさ」から、冒頭の私の疑問が生じていたわけだ。しかしビジネスの世界はどうだろう。確かに新製品を開発するとき「知」は必要である。だがその新製品が売れるかどうかは「知」からはまったくわからない。かつてそうであったのだが、パソコンのマニュアルを読んだからと言って、パソコンが使えるわけではない。そこにはいっぱい「解説」が書いてあるが、素人にはまったくわからない「呪文」が書いてあった。ユーザー・オリエンテッド(利用者指向)ではなかった。いわば「徳」がなかった。ソフトもそうだ。最近のソフトには様々な機能が付加されている。だが初心者が本当に使う機能はわずかである。ここでも「徳」がないとも言える。

これらは卑近な事例だが、教育現場ではしばしば「知」は教えるが「徳」は教えない。また、学校は「徳」を教える場所ではないとされた。で、教えるとなると今度は「道徳教育」を教えることになる。「徳」は教えるものではなく、先生が背中で「教える」ものであろう。先生に「徳」がなければ、生徒は「徳」がわかるはずもない。でもこれは難しい。だが、少なくとも先生は「仁」(人柄といってもよいだろう)をそのまま表出し、その「仁」を以て「知」を伝えなければならないのだろう。

「しかし、その仁は、人間からかけはなれたものではなかった。求めさえすれば、そこに現れるような、そういう人間性なのである。」

(267頁)

少なくとも、ビジネスの世界では「知」と「徳」を合一しなければならないのではないか。そうでないと、消費者や従業員の心がわからないのではないか。そうでなければ、売れる商品開発、トップの意を体して働く従業員は得られないのではないか。

**コーポレート・ガバナンス** 「『子、罕に利と命と仁とを言う』(子罕編 9-1)

先生は、利と命と仁とについてはまれに話されるだけだった。

この解釈が分かれるのは、『罕に』とあるのに、仁については論語の中に六十箇所ほど出てくるからである。これは、仁を軽々しく口にすることはなかったと解せばいいだろう。残る利と命とは、確かにともに数箇所しか登場しない。利は、孔子にとって第一義的なものではなかったからである。それなら、命はどうか。おそらく、命が不可知だからであり、これを考究してゆけば煩瑣で抽象的な形而上学に陥ってしまうからだろう。孔子の原儒教はこれを嫌った。公冶長篇第十三章に子貢の言葉として、『先生が人性(人間の本性)と天道について話されるのを聞いたことがない』とあるのも、これと同じである。」

(241-242頁)

ここから学ぶべきことは何か。コーポレート・ガバナンスだとか、CSR(企業の社会的責任)などが最近流行しているが、これらの意味を詮索しても無意味である。論語に従えば、具体的に何をしなければならないかを語るべきだということになる。

**HPを見て下さい。又何でも意見を。**

皆様のご意見を歓迎します。HP (<http://www.finance.ritsumei.ac.jp/matsumura/>) もご覧下さい。また、メールで意見交換しましょう。メールをよこして下さい ([matsumura@mba.ritsumei.ac.jp](mailto:matsumura@mba.ritsumei.ac.jp))。

